

藍を育てる

富士見市立難波田城資料館（2025年3月版）

【必要なもの】

〔畑の場合〕腐葉土、苦土石灰、肥料（油かすまたは鶏フン）

〔鉢植えの場合〕大きめの植木鉢（またはプランター）、土、腐葉土、苦土石灰、鉢物植え用の肥料

○苗作り

（1）土づくり

種をまく前に、土に腐葉土・肥料、苦土石灰を、1週ずつ間隔をあけてまいていく。

※苦土石灰の使用については諸説ある。一般的には土壌が過度の酸性、カルシウム不足の場合に施すとされている。なお当館では土壌を弱酸性に調整する量を使用している。

（2）種まき

3月から4月、霜がおりなくなった頃に種をまく。

※直径30cm円形のプランターで、小さじ半分程度。

※畑の場合40cm四方に大きじ1杯程度。

種まきの後、発芽まで2～4週間ほどかかる。

※芽が出なくてもあせらない

（3）水やり

藍の成長には水が必須。毎日の水やりをかかさないように。水は朝もしくは夕方に、1、2度。

※成長段階にあわせて、あげる水の量も増やすように。

※種は、秋頃までまくことができ、葉の収穫も可能。ただし霜が降りると栽培は困難。種の採取もできない。



藍の芽（定植前）

○定植

（4）間引き・定植

芽が出て、1ヶ月後、苗の丈が15cm程度になった時期におこなう。

定植する際は、苗3～4本をまとめて1株にする。この時、苗の本数を増やしすぎると、根がつかずに枯れてしまうので注意する。根を埋める穴を5cm程ほり、苗が立つように周りの土で支えるようにして植える。畝幅80cm程度、50cmほどの間隔にするとよい。

〔プランター、鉢植えの場合〕

2～3cm間隔に一本を残して他は間引く。間引いたものは別のプランターに定植してもよい。植え替えるプランターの土は8分程度入れる。株と株の間隔は広めにとる。



定植の際の植え方※1

（5）追肥

月に1度の間隔で、根元の近くに追肥をおこなう。

※この際、肥料が葉にかかると、その部分が肥料やけし、枯れてしまうので丁寧におこなう。

（6）害虫駆除など

なめくじ、あり、アブラムシなどがつくことがある。なめくじには小皿にビールを入れて置いておくと、アブラムシには、水に溶いた小麦粉または片栗粉を散布するのも有効。必要に応じて殺虫剤を用いる。その他、雑草取りもおこなう。



藍（定植後）

○収穫（葉・種）

（7）一番葉の収穫

葉の大きさが 10 cm 程度になった頃（7月下旬～8月上旬）が刈り取り時期。土から 15 cm くらいのところで切り揃えるようにして茎ごと刈り取る。

※葉を刈り取ったときに残る茎は、挿し木のようにして育てることができる。茎を 20～30 cm に切り、その半分くらいを土に挿す。なお、プランターを使う場合は、赤玉（大粒）などの水はけのよい土を入れてから庭土や野菜用の土などを入れる。そのうえで、挿した後、葉が出るまでは日陰におく。プランターは乾きやすいので水をたっぷりあげるとよい。

（8）土の追加（鉢植え、プランター植えの場合）

藍は根の成長が早く、プランターの土をすべて根で固めてしまう場合がある。この場合、プランターと土の間に隙間があく場合があるので、肥料をまぜた土をそこに足してやる。

（9）二番葉・三番葉の収穫

その後、藍が成長し脇芽が出てきて大きくなると、二番葉、三番葉の収穫がおこなえる。収穫は一番葉と同様におこなう。

※秋口になり、花が咲いている状態でも収穫は可能だが、この場合、花はとらないように注意する。

（10）種の収穫

種は粒状の花、一つ一つの中にできる。種の数が増え、色がこげ茶色になったら収穫をおこなう。この際、十分に乾燥していなければ、根元から藍を刈り取ったうえで逆さまに吊るし、乾燥させる。そして乾燥したものから、房を手で刈り取る。そのうえで、茎から種の部分をしごき取る。その後、種についた殻をとる。少量であれば、手で揉み、殻を取ってもよい。多量の場合は、すり鉢と柔らかいボールを用意し、力を入れずに擦り、殻を取る。殻を取った後は息を吹きかけ、種より軽い殻を吹き飛ばし、選り分ける（この時、カメラ用のブローアを用いてもよい）。

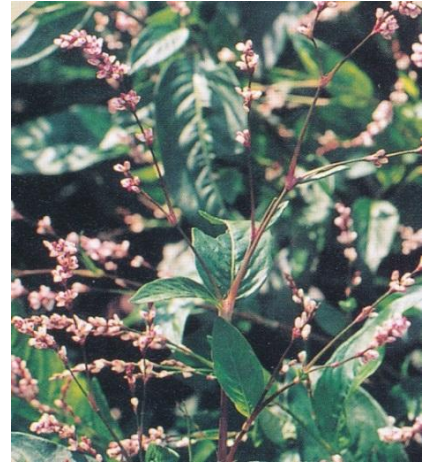
※収穫時期が遅くなり枯れすぎると、房の根元の細い茎が折れ、種が地面に落ち、発芽して収穫できなくなってしまう。

※秋雨が続いて降る時期になると、枯れた藍でも水気を帯び、収穫が難しくなってしまう。

（11）種の保存

コルク栓のある瓶、もしくは紙袋などに入れて、涼しいところで保存する。

※収穫した種は、2年目以降は、発芽率が極端に下がるので注意する。



藍の花※2



房状になる藍の種（手で刈り取ったもの）



しごき取った藍の種（右は殻付き）

※1 「そだててあそぼう 18 アイの絵本」より。書誌は4頁を参照。

※2 「阿波の草染涙色 増補改訂版」書誌は4頁を参照。

藍の葉で染める（生葉染めの方法）

【必要なもの】

絹布^{けんぷ}10g（ハンカチで1～2枚程度）、藍の生葉50g、水700ml、ミキサー、濾すための布袋
中性洗剤

（1）絹布の前処理（精練^{せいれん}）

染める布を、中性洗剤をいれたお湯に15分くらい浸してから、水を替え、よく洗う。

※絹に含まれる接着質の成分（膠・ゼラチンとよばれることのあるもの）、糸や布にする工程でついた油分を取り除くためにおこなう。

（2）刈り取った藍を、葉と茎に分けて、50gの葉を用意する。

※藍1kgから約450gの葉が採れる。

（3）水700ml、生葉50gをミキサーにいれ1分間^{かくはん}攪拌する。 } この処理は5分以内で行う！
（4）ミキサーで攪拌したものを布で濾して、染料液を作る。 }

※水はカルキを抜いたものを用いると、色ムラが少なくなるという。

（5）染料液に絹布を入れて15分間ほど浸す。この間 手で絹布を動かし染めムラがでないようにする。

※この際、絹布を液から出さないようにする。

（6）15分間染めたら、布をたたんで、手のひらで叩き 押ししてしぼる。

（7）布を広げて、空気にあてる。

※色素は空気に触れ、酸化することにより発色する。

※発色を促すためにおこなうが、これまでの工程でほぼ酸化しているので（7）（8）の工程は短時間でよい。

（8）4回ほど水を変えてよく水洗いする。

※染めムラをふせぐためにもおこなう。

※水で洗う際にオキシフルを入れ、酸化を促進させる方法もある。この際は、洗面器1杯分の水にオキシフルを小さじ1杯強を入れて、水洗いをする。

（9）タオルに重ねて巻き脱水、風通しのよいところに干し、できるだけ早く乾かす。

※時間がかかると色がくすんでしまう。



藍の生葉を攪拌し染料液を作る



藍の生葉を用いた絞り染め

※絹のほか、羊毛やナイロンも染めることができるが、色合いが異なる。

附 藍の乾燥葉染めについて

【必要なもの】

乾燥葉 100g、染める布(木綿等)、炭酸ナトリウム 15g×3、ヒドロサルファイトナトリウム(以下
ヒドロと略す)15g×3 水 6.5ℓ、濾し布、鍋×2

- (1) 水 2ℓで乾燥葉を 10～15 分煮て濾し布でしぼる。
- (2) 煮た葉と水 1.5ℓ、炭酸ナトリウム 15g、ヒドロ 15g を鍋に入れ、液の表面が青くなるまで(10
～15 分程度)煮る。
- (3) 煮出した液(染め液)を濾して鍋にためる。
- (4) (2), (3)を 3 回繰り返す、染め液 4.5ℓを得る。
- (5) 染め液の温度は 40～45℃に保つ(下がったら火を加え加温)。
- (6) 事前に水に浸した布を絞り、染め液に 5 分程度浸す。
- (7) 染め液から布を出し空気に触れさせて発色させる。
- (8) (6), (7)を 3 回繰り返す。

※作った染め液は色素が残っていれば後日使うことができます。その際は、炭酸ナトリウム、ハイ
ドロを 15g ずつ加えて 40～45℃に加熱して使用します。

※使い終わった染め液は普通は生活排水として下水に流してよいものです。

藍染めについて

藍染めは大別すると、藍の生葉を利用する「生葉染め」と藍草^{あいぐさ}(藍の色素を含む植物。他にも何
種類かがあります)を染料にしたものを発酵させる「藍建て」の 2 種類があり、それぞれ異なった
仕組みで染まっています。今回紹介した、生葉染めは、化学的には次のような工程を経ています。

①生葉に水を加えてミキサーで攪拌することで、藍の葉に含まれる色素の元になる成分(インディ
カン)が水に溶けだす。

②インディカンが同じく葉に含まれる酵素^{こうそ}と反応する(インディカン→インドキシル)。

③インドキシルが繊維に染み込み酸化して、水には溶けない性質を持つ色素(インディゴ)になる。

そのために、酵素が熱でこわれないように「水」を用い、また「酸化」が進んでいるうちに布に
色素をむらなく染み込ますために「手早く」作業を行う必要があります。

またインドキシルは動物性の繊維には染み込みやすく、植物性の繊維には染み込みにくい性質を
持っています。そのため、この「生葉染め」の方法では、絹や毛糸を染めることはできますが、木
綿、麻は、ほとんど染まりません。木綿、麻などを染めるには「藍建て」をする必要があります。

藍を建てる工程は以下のとおりです。

①インディゴを適度に還元し、ロイコインディゴに変える。

②ロイコインディゴが、水によく溶けるよう、液をアルカリ性にする。

そしてロイコインディゴの水溶液に布(繊維)を浸すことで、繊維にロイコインディゴを絡ませ
ます。これを液から取り出し、空気にあてることで、酸化され、インディゴに戻り、発色、定着し
ます(染めの工程)。藍の乾燥葉染めは、上記の「藍建て」をして布を染めるものです。



資料館では、古民家(長屋門)前にある畑で毎年、藍の栽培をしています。又その葉を使った、ふる
さと体験「藍の生葉染め」を例年夏に実施、藍染めの技術習得を目指し活動をしている「藍染めの
会」もあります。以上の詳細、ご不明な点については、資料館担当者までお問い合わせください。

【参考文献】

アキヤマセイコ(2009)『阿波の草染涙色 増補改訂版』自然塾・染工房 G.SHIBUKOYA

日下部信幸編(2005)『そだててあそぼう 18 アイの絵本』(社)農村漁村文化協会

箕輪直子・有賀潤子(1997)『たねから育てる あいの生葉染め絵本』

山崎和樹(2012)『つくってあそぼう 26 藍染の絵本』(社)農村漁村文化協会